

Topics

裾野市でリノベーションまちづくり講演会開催 暮らしの”楽しさ”の本質を語る

裾野市で7月24日、リノベーションまちづくり講演会が開催されました。会場には、まちづくりに関心を持つ市民をはじめ、地元の若手事業者、不動産オーナー、行政職員などおよそ40人が集まりました。



講師には、株式会社まめくらし代表取締役の青木純氏が登壇。「未来に幸せな日常を受け継ぐために、このまちのパブリックライフを市民と創る」をテーマに、全国各地での実践知を交えながら、これからの持続可能なまちづくりのあり方について講演しました。

青木氏は冒頭、「地域活性化」や一過性の「賑わい」という言葉に触れ、「活性化したものはやがて衰退し、瞬間風速的なイベントの後には寂しい日常が残ってしまう。大切なのは、日々の暮らしの中で持続する“いい湯加減”の状態をつくること」と説明。

「人口減少や少子高齢化を過度にネガティブに捉えるのではなく、まちが自分たちにとって『ちょうどいいサイズ』に最適化していくプロセスと捉え直すことが大切だ。目指す未来像は言葉だけでは解釈がぶれるため、一枚のイラスト(絵)として描き、仲間とすり合わせる事が欠かせない。」とし、「大きな社会システムに抗うのではなく、『目の前』にいる家族や仲間、顧客といった一人ひとりの幸せな日常を丁寧に耕していくことこそがまちづくりの基盤になる」と語りました。

その上で、自身が手掛けた東京都練馬区の賃貸住宅「青豆ハウス」の実践を紹介。境界線を低くして外と中が溶け合う空間設計や、生活動線上に設けた共用のピザ窯を通じて自然な挨拶や助け合いが育まれていくプロセスを解説しました。

さらに、1階のキオスク「マメスク」での子どもの小さな挑戦から、私設図書館や週末の花屋といった小さな商いが連鎖し、やがて行政をも巻き込んだ新たな区民公園づくりへと発展したエピソードを挙げ、「行政の計画を待つのではなく、まず『私』の楽しい暮らしから始め、境界線を溶かしながら『私たち』、そして『まちのみんな』へと接点を耕していくことこそがパブリックライフの本質だ」としました。

また、主宰する「大家の学校」の取組に触れ、「行政の計画以上に、まちの未来を左右するのは土地や建物を所有するオーナーの意思。次世代へ土地のバトンが渡る時代において、オーナーと実践者がいかに信頼関係を築けるかが重要だ」と指摘しました。

さらに、熊本県玉名市での自然放牧や有機農業と料理人を結ぶマーケット「ノウレッジ」の事例や、かつて治安が悪く消滅可能性都市とされた豊島区池袋での「IKEBUKURO LIVING LOOP」の取組にも言及。

公園のリニューアルを起点に、道路空間の公園化に向けて警察や行政と粘り強く対話を重ね、路上への給排水設備導入や食のコンテンツを展開していった軌跡を振り返りました。沿線の有機農家と連携した屋外ディナーなどを通じて、通りが心地よい居場所になり、結果として池袋が「本当に住んで幸せな街」上位へと評価を一変させたプロセスを示し、「最初から打算や経済合理性ばかりを追うのではなく、身体性(美味しさ・心地よさ)を伴うコンテンツを仲間と共創し続けることが、持続可能なまちの文化を育てる」と語りました。

最後に青木氏は、「一番大切なのは、『裾野に暮らすことが楽しい』『裾野で暮らせて幸せだ』と感じる人が地域に一人でも増えること。仲間と対話を重ね、妄想を絵にし、自分たちが愛せる日常を一步步形にしていってほしい」と、今後のまちづくりへのエールを送りました。